梁啓超『飲冰室詩話』
——詩話文学史上の位置付けとその時代性

細川直吉

一　はじめに

梁啓超は晩清から民国初期に活躍した啓蒙思想家、ジャーナリスト、政治家、学者である。『飲冰室詩話』は同時代の詩人の作品の評論であり、梁啓超はそれを自身が発行する政治論説雑誌『新民叢報』に連載した。(1) これより先、黄遵憲は詩の革新を主張し、それに基づき夏曾佑、譚嗣同が「詩界革命」を唱導したが、梁啓超はこれに対して『飲冰室詩話』中で的確な概念を与えた。彼はそれを、理想の新詩とは新意境があり、新語句を使い、両者を旧風格の中に鎔鑄するものだと表現し、理想的作品として黄遵憲の詩を多く引用した。(2) 梁啓超の「詩界革命」論は、多くの研究者により文学史上高く評価された。筆者も別稿で『飲冰室詩話』における「詩界革命」の標語、黄遵憲詩の喧伝、小学校唱歌教育への実践的貢献等を論じた。(3)

一方『飲冰室詩話』連載終了の翌年・翌々年、王国維は文学専門雑誌『国粋学報』に三回に分けて『人間詞話』を発表

した。そこでは唐末・五代から南宋までの詞人の作品を中心に品評した。また「境界」説を唱え、詩詞では情と景の融合が最も重要であると主張した。文章は短く凝縮されて難解であるが、その見解は詩詞鑑賞が本来備える審美観に基づいており、関係分野の人々に高く評価された。

近年、台湾の文学者林明徳は『飲冰室詩話』を論ずる中で、梁啓超、王国維の両著作は詩学の双璧でありながら、世評の変遷は全く対照的だと述べた。[4] つまり前者は発表時点に一世を風靡したが歴史的に次第に忘れ去られ、後者は後に文芸批評界の指針として尊崇されるに至ったという。しかし林はその理由を追求していない。本論は両著書を対比すると共に、『飲冰室詩話』は後世の政治的文化的流れの中で不当に評価されたが、優れた詩話であり、依然今日的意義があることを述べる。そのために、第一に詩話史の中で『飲冰室詩話』の位置づけを論じる。第二に『飲冰室詩話』の構成とその主張「詩界革命」を整理した上で文学史的位置づけを再度論じる。第三に比較のために王国維の『人間詞話』の特徴を整理し、その「境界」説の意味を解釈する。最後に王国維、梁啓超を対比し、梁啓超の評価をまとめる。

二　詩話史における『飲冰室詩話』の構成、主張及び文学史的位置づけ

二・一　詩話の二つの類型

詩話は詩学評論である。郭紹虞は、丁福保編『清詩話』前言で詩話の歴史について述べて、詩話は北宋の欧陽脩の「詩話」と題する文に始まり、その文体を後人が定型化したものだと言う。[5] 欧陽脩は「詩話（六一詩話）」冒頭で、「私は汝陰に引退し、そしてつどいをして閑談の材料を提供するのだ（居士退居汝陰，而集以資閒談也）」と述べる。[6] 欧陽脩の「詩話」は当時の詩人を取上げるが、詩評よりむしろ詩作の背景を述べ、全体で二八段の短篇である。特に彼の代表的長篇詩「水谷夜行子美・聖俞に寄す」に関する箇所は、二人の親友梅堯臣（聖俞）と蘇舜欽（子美）との交友を述べて感動的で

ある。欧陽脩以後、詩話を冠する題名の著作が書かれるようになり、随筆と詩学評論が混然とするジャンルが形成された。

郭紹虞は、欧陽脩の「六一詩話」の体裁を詩話の第一の典型とし、南朝梁の鍾嶸の『詩品』の体裁を第二の典型とする。『詩品』は五言詩の文体上の優位性を述べ、漢以後梁までの五言詩の詩人一二三名を選び上中下の格付け品評を行ったものである。郭紹虞は、詩話の論著は欧陽脩か鍾嶸かのどちらかの類型に属し、前者は「気軽な随筆（一種軽鬆的随筆）」、後者は「厳粛な文学評論著作（文学評論中厳粛的著作）」という。

二・二　類型的に見る『飲冰室詩話』

郭紹虞は詩話の二つの類型について比較的長い説明をしている。以下にはそれを短く整理してまとめる。

詩話のテーマは詩と詩人を中心とする時事記録と時事評論、詩作品採録と詩文評論の四項目に大別される。この内前二者を重視する詩話をここでは便宜的に第一類型、後二者を重視する詩話を第二類型と呼ぶことにする（郭紹虞は第一、第二という呼び方はしていない）。第一類型の詩話は、随筆的傾向が強く気軽な雰囲気を醸す。詩話の著者は時事と詩に触発された感興を、一気呵成に筆まかせで書き進み、それ故比較的雑然とし易い。時事評論では大体その時代を取上げ、古代の論議に束縛されずに済むが、客観性と精密な論議が不足し易い。「六一詩話」は時事評論を主とし、また随筆的傾向が強い。一方第二類型の詩話は、文学史的系譜を明確に分析し、論理的で厳粛な雰囲気を醸す。詩話の著者は、論旨を明確にし、材料を取捨選択して整理配列する。詩評では大体古人の詩論を尊重するが、それには既に定評があり、著者の独断的主張を排し、確証に基づく厳密な論議と客観性が保たれ易い。『詩品』は詩文評論を主とし、また厳粛な文学評論の傾向が強い。以上が郭紹虞による詩話の類型的相違と特徴の説明である。

郭紹虞が詩話の主要テーマとする四項目、時事記録、時事評論、詩作品採録、詩文評論に関して、『飲冰室詩話』はい

ずれも同等に視て、様々な視点から詩を論じる。特に詩界革命論、史詩論、尚武の精神や音楽と詩の関連性は特徴のある詩論である。しかしそれらは時事記録、時事評論と交互に繰返して配置され、専門的詩学理論書の形態ではない。梁啓超は雑誌連載に際して、毎回即興的に一気呵成に書いたであろう。また康有為、黄遵憲、譚嗣同、唐才常、夏曾佑、狄葆賢等との交際を述べる感動的な箇所は、ちょうど「六一詩話」における梅堯臣、蘇舜欽との交友を述べる箇所に匹敵する。それ故、筆者は『飲冰室詩話』を第一類型と見る。

郭紹虞は、学問芸術の時代変遷は粗雑から精密に進むので、「六一詩話」以後の著作は次第に詩学理論を重視するようになり、随筆形式は時代遅れになったという。しかし、個別的には「六一詩話」系統のレベルの高い詩話もあり、『詩品』系統でも透徹した評論に達しない詩話もあろう。梁啓超の詩話は第一類型の優れた詩話である。これに対して王国維の詞話は、詩詞の採録と評論が主体であり、第二類型の優れた詩話（厳密には詞話）だと言える。

二・三　清代・民国期の詩話叢書三件と『飲冰室詩話』

清代は詩話の最盛期であり、蔣寅は『清詩話考』清詩話見存書目で清代詩話の書籍は九六六種、清詩話待訪書目（亡佚不傳之書）も加えると一四六九種あるという。[7] 丁福保はこれらの中から四三種の詩話を選んで収録し、民国五年に『清詩話』を出版した。郭紹虞は、丁福保の詩話選定には清朝考証学の時代的特徴が反映されていないと考え、丁福保の採らない第二類型の詩話三四種を選び、一九八三年に『清詩話続編』を出版した。[8] さらに張寅彭は上記二件の詩話叢書の後を引継ぎ、民国成立後から一九四〇年代までの伝統的古典詩を論じる詩話を選び三七種の詩話を収録し、二〇〇二年に『民国詩話叢編』を出版した。[9]

上述の三件の詩話叢書中の合計一一四種の詩話に『飲冰室詩話』は含まれていない。その理由を考えてみるに、丁福保

の場合は晩清期の詩話を取上げないからであろう。あるいは有名な袁枚の「随園詩話」を収録せぬことから見て、大部な詩話はバランスにそぐわずに省いたのかもしれない。郭紹虞の場合には、清朝考証学を反映する第二類型の詩話ではないと考えたからであろう。張寅彭編の場合には、名作ではあるが民国前夜の作品だからと断っている。[10] しかしながら、このように三種類の詩話叢書に収録されていないからと言って、『飲冰室詩話』は、詩話史上決して価値がないと見做された訳ではない。

二・四　『飲冰室詩話』と白話詩問題

『飲冰室詩話』の評価をする上で、重要な要素として白話詩問題がある。それは梁啓超の後半生が現代中国詩の歴史的転換期に当たるからである。これに関して張寅彭は『民国詩話叢編』で次のように指摘する。中国の詩は、五四文学運動により白話詩（新詩）と古典詩（旧体詩詞）に完全に二分化した。そして詩話の著作も大きな影響を受ける。つまり、著者は古典詩を論じ伝統的詩学の立場をとるか、白話詩を論じ新詩学の立場をとるか、あるいは両者の間に調整を入れるか、いずれかを明確にせねばならない。新詩派と旧詩派は対立し排斥しあうが、通常公式的には結局新は旧を圧倒し、旧は没落して歴史的遺物となり存在価値を失ったと看做される。しかし、実は長い伝統をもつ古典詩は生き残り依然力を蓄えており、現代詩壇で新詩と旧詩の勢力は二分拮抗状態だという。[11]

張寅彭の観点は『飲冰室詩話』の今日的意義を考える上で大変重要である。その伝統的詩学対新詩学における梁啓超の立場を見よう。『清議報』掲載の「ハワイ游記」の中で梁啓超は「詩界革命」を定義して、新意境と新語句を旧風格に入れることだと述べた。（第一要新意境。第二要新語句。而又須以古人之風格入之。）従って彼は広い意味で新時代と歴史的伝統の調和を求める。しかし、白話詩にまで言及しない。これに対して梁啓超が後半生に明らかにする白話詩観を少し述

べておきたい。

一九一七年に雑誌『新青年』に胡適「文学改良芻議」、陳独秀「文学革命論」が掲載され、これは白話文学運動の契機となったことは周知のとおりである。[12]『飲冰室詩話』の発表は、一九〇二年から一九〇七年の間、つまりそれは白話運動開始の十年前であり、白話は大問題と認識されていない。その二十年後、一九二七年、五五歳の梁啓超は「晩清両大家詩鈔題辞」の中で白話詩を論じた。[13]そこでは白話詩が将来成功裏に発展し文言詩と両立すると予測しながらも、一方で当時の白話詩水準は文言詩に遠く及ばないと言い、白話詩の課題を挙げて解決に長時間を要すると述べた。彼は、詩は厳格過ぎる格律に従う必要はないが音節の調和が絶対必要であり、かつ凝縮した文章に含蓄のある語句を含めるものだと主張する。これは「詩界革命」論の「旧風格に鎔鋳する」という趣旨を引継ぐ。それ故梁啓超の後半生の白話詩論まで含めて、彼は詩学上、伝統詩と新詩との間に調整をとる立場だと筆者は考える。

三　『飲冰室詩話』の構成、主張及び文学史的位置づけ

三・一　『飲冰室詩話』の構成

梁啓超は『飲冰室詩話』冒頭で次のように述べる。

> 我生愛朋友，又愛文學，每於師友之詩文辭，芳馨悱惻，輒諷誦之，以印於腦。自忖於古人詩，能成誦者寥寥，而近人詩則數倍之，殆所謂豐於昵者耶。其鴻篇鉅製，洋洋灑灑者，行將別裒錄之爲一集。亦有東鱗西爪，僅記其一二者，隨筆錄之。

私は朋友を愛し、又文学を愛し、つねに師友の詩文辞に於いて、美しくも憂いある情緒表現は、直ちにこれらを朗

読して、頭脳に刻む。自分で古人の詩を考えると、暗唱できるものは極く僅かであるが、しかし近人の詩であればその数倍で、殆ど所謂身近な者ほど豊富だ。その作品の大作、盛大で絶えることなく続くものはやがて別に集め記録して一集としよう。またここには荘厳な全体像を暗示させる小部分があり、僅かにその一二を記憶するが、ここで筆に任せて記録するのである。

この文中の芳馨悱惻は『飲冰室詩話』中のキーワードであり、東鱗西爪とともにそれらの解釈は筆者の別稿に述べたのでここでは訳文だけ示す。[14] これは簡単な書き出しであるが、しかし『飲冰室詩話』の内容はそれほど単純ではない。林明徳は、梁啓超が取上げる問題を次の六層の面に要約できるという。[15] ①詩歌原理、②詩歌伝統、③風格人格、④詩界革命、⑤詩歌音楽、⑥詩歌批評。この中で論旨の最も明確なのが詩界革命理論である。

『飲冰室詩話』に引用される詩の作者の大多数は彼の師友、同志及び詩を送る雑誌読者である。名前が明らかな詩人は一一七名、作者名不詳の詩が八件ある。[16] 引用作品数の最も多いのは康有為と黄遵憲の二人で、各々六十件前後である。次に引用作品の多いのは悔餘生、雪如、譚嗣同、狄葆賢、何翮高、呉又陵、曹民父等七人であり、各人それぞれ三十から四十件である。梁啓超本人の引用作品は十八件であり、少なくない。

三・二　黄遵憲から梁啓超への詩界革命の継承

陳良運は梁啓超を「詩界革命」の最も熱心な宣伝者であり、「詩界革命」なる言葉は実に彼によって繰返して使われ、国内外に広められたという。[17] それは梁啓超が尊敬した黄遵憲の主張に基づいている。

黄遵憲は作詩の際に因襲模倣から脱却すべきことを唱え、『人境廬詩草』自序で自分の作詩原則を次のように説明した。[18]

（一）『詩経』以来中国古典詩の特徴である「比興寄託」の観念に基づき構想する。（二）対偶形式の文体を用いる。（三）「離騒」と「楽府」の精神を採用するがその文体は真似ない。（四）古典文章家の巧妙な修辞技術を取入れる。（五）古人が従来書かなかった古代より現代に至るあらゆる時代・あらゆる分野に新題材を求める。（六）往昔の大詩人から近時の小詩人まですべての風格を参考にするが、特定の詩人詩派に追従せず、飽くまで自分自身の詩を書く。

梁啓超の友人夏曾佑、譚嗣同は黄遵憲のこの主張に賛同して、「詩界革命」を唱導した。彼らは習得したばかりの新学（西洋学問）の知識を詩に盛込んだ。例えば『飲冰室詩話』第六十段は譚嗣同の詩「金陵聽説法」中の一聯を引用して、「道義倫理はカーストにより惨めなり、立法会議は国会議院に於いて盛んなり（綱倫惨以喀私徳，法會盛於巴力門）」というが、喀私徳はインドのカースト、巴力門は英国議院パーラメントのことである。また同じく第六十段は夏曾佑の詩中の一聯を引用して、「人有り雄起す琉璃の海、獣魄蛙魂龍徙す所（有人雄起琉璃海，獣魄蛙魂龍所徙）」という。これは『旧約聖書』ヨハネの黙示録からの抜粋である。前句は、天上の神の玉座の前の床が水晶に似たガラスの海に喩えられることを表す。後句は、神との世紀末の決戦に臨むサタン（龍）とその配下の獣、偽預言者達が口から蛙のように穢れた悪霊を吐き出し、悪霊を使って参戦者をハルマゲドンの地に結集させることである。[19] 確かに因襲模倣から脱却しているが、梁啓超はこれらの詩句は新奇で難解な語句を並べただけであり、人々を感動させる詩ではないという。

それでは梁啓超は「詩界革命」を如何なるものと認識したのであろうか。梁啓超は日本亡命後、「詩界革命」に新意境、新語句、旧風格の三つの標語を与えた。これが「詩界革命」の簡潔明瞭な定義なのである。それに関して、雑誌『清議報』掲載の「夏威夷游記（ハワイ旅行記）」で次のように言う。[20]

欲爲詩界之哥倫布瑪賽郎，不可不備三長。第一要新意境。第二要新語句。而又須以古人之風格入之。然後成其詩。

不然，如移木星金星之動物以實美洲。瑰偉則瑰偉矣，其如類何。若三者具備，則可以爲二十世紀支那之詩王矣。

詩の世界のコロンブス、マゼランたらんと欲すれば、三つの特長を備えねばならない。第一に新意境が必要である。第二に新語句が必要である。そして又古人の風格によりこれを入れねばならない。然る後にその詩ができる。そうでなければ、木星金星の動物を移してアメリカを満たすようなものだ。それは魁偉といえば魁偉だが、何物にも類さない奇怪な物になってしまう。もし三者が備われば、二十世紀の支那の詩王たることもできる。

また、『飲冰室詩話』第六三段では新意境を強調し、むしろ新語句を抑制する。

過渡時代，必有革命。然革命者，當革其精神，非革其形式。吾黨近好言詩界革命。雖然，若以堆積滿紙新名詞爲革命，是又滿洲政府變法維新之類也。能以舊風格含新意境，斯可以舉革命之實矣。苟能爾爾，則雖間雜一二新名詞，亦不爲病。

過渡の時代には必ず革命がある。そして革命とは、その精神を改めるべきことであり、その形式を改めることではない。吾が仲間は近頃好んで詩界革命と言う。しかし、もし紙一杯に新名詞を連ねたものをうず高く積み重ねることを革命というならば、これは又満洲政府の変法維新の類である。旧風格により新意境を表現することができれば、それこそ革命の実を挙げることができる。もしそのようにできれば、間に一二の新名詞が混ざっていても、また欠点とはならない。

しかし『飲冰室詩話』中には「詩界革命」の標語、新意境、新語句、旧風格を明確に説明する文章はない。従って我々

は『飲冰室詩話』全体から、梁啓超がそれらを如何に把握していたか考察しなければならない。

まず新意境について考える。意境とは文学作品が表現する情調と境地であるが、ここでは「新」の持つニュアンスが問題である。先に述べた黄遵憲の『人境廬詩草』の「古人が従来書かなかった古代より現代に至るあらゆる時代・あらゆる分野に新題材を求める」は、広い意味の新意境である。例えば『飲冰室詩話』第八段に引用される黄遵憲の長篇詩「セイロン島の臥仏（錫蘭島臥佛）」は太古の時代の描写から、仏陀の活動と仏教の興亡を経て、清代末期の欧米のアジア進出を述べる。梁啓超はこれをインド近史、仏教小史、地球宗教論、宗教政治関係説等と呼ぶことができるというが、そこには中国衰亡の視点に立つ新意境が籠められている。夏曾佑・譚嗣同が取上げた、新学の知見もやはりは新意境である。しかし『飲冰室詩話』が最も重大な意境と見るのは晩清期中国の時事問題である。それらは例えば第三九段に引用される邱逢甲の詩「己亥秋感八首」であり、詩人は清朝が日本に台湾を割譲した時に現地で徹底抗戦を主張して活動する感慨を述べた。黄遵憲の第七九段の詩「朝鮮嘆七首」、第九十段の詩「琉球歌庚辰」、「越南篇甲申」等々も同様な中国周辺の国際時事問題である。

次に新語彙について考える。新語彙は新意境と同様に、広い意味では古人が詩中で使用しなかった言葉すべてである。しかし多くはこの時期に西洋から中国に入って来た事物と観念である。先に引用した夏曾佑、譚嗣同の新学の知識に基づく語彙も含まれるが、梁啓超はそれらの多用に反対する。『飲冰室詩話』第二九段には黄遵憲の「今別離」四首を引用する。それは彼がロンドンに参事官として単身赴任したとき、故国の妻の立場で夫を思う気持ちを書いた五言排律であり、当時の新技術を次のように詠んだ。「願う所は君の帰る時、快く軽気球に乗らんことを（所願君歸時，快乘輕氣舊）。」「馳書迅きこと電の如し、是れ君の寄す所と云う（馳書迅如電，云是君所寄）。」前者の軽気球、後者の馳書（電信）は、新時代の先端技術を示す新語彙である。梁啓超が夏・譚の新語彙には否定的なのに、黄の新語彙を認めるのは、詩境の時事性

と表現の巧拙を問題にするからである。

最後に旧風格について言えば、『飲冰室詩話』には旧風格の説明が全くなく、梁啓超はその必要性を認めなかったように見える。筆者は、旧風格の最重要条件は詩の格律だと考える。それは表面的には近体詩における一句の文字数と平仄の配列及び押韻であり、更には絶句、律詩、排律等の句数配列の規則である。しかし、その背景には音楽的節調と音声的諧調の要請がある。『飲冰室詩話』第七七段で梁啓超は古来中国の有韻の文は音楽と組合わされていたと述べ、詩における音楽の重要性を論じている。一方音楽的要素のほかに旧風格は修辞を意味しよう。黄遵憲が『人境廬詩草』自序で述べた、比興や対句がそれである。梁啓超の旧風格の趣旨は音楽的要素と文言の修辞法を合せたものだと筆者は考える。とすれば、黄遵憲、梁啓超の主張は、中国の伝統的文体で新思想、新事物を表現することであったと考えられる。

このような梁啓超の定義付けは十分に評価されなかった。それは暫く後に起こる白話運動に関係する。つまり『飲冰室詩話』発表の十年後に詩人たちは争って口語詩、白話詩という「新詩」を作り、伝統的文体を「旧詩」として排斥した。それ故に、梁啓超は最近まで新詩出現直前の過渡的な詩歌評論者と看做されてきた。たとえば、一九八二年刊行の人民文学出版社版『飲冰室詩話』の舒蕪による校點後記は次のように言う。(21)

「飲冰室詩話」雖然主張詩歌形式不必革新，但是，內容與形式是辯證的統一，內容決定形式，形式反作用於內容，既然主張內容必需革新，則形式的革新仍然是避免不了的。…(中略) 五四時期的新詩運動，以其空前未有的反帝反封建的徹底性，取得了巨大的成績。但是它也沒有很好地解決羣衆化和民族化的問題。直到毛主席的《在延安文藝座談會上的講話》，纔明確指出並深刻地解決了這兩個問題，給中國文學藝術發展包括詩歌發展指出了唯一正確的工農兵方向。

在這個方向之下，新詩運動今天正在繼續勝利前進。

「飲冰室詩話」は詩歌形式の革新が必要ないと主張するが、内容と形式は弁証法的に統一されており、内容は形式を決定し、形式は内容に反作用を及ぼし、内容が革新を必要と主張する以上は、形式の革新も依然避けられない。…（中略）五四時期の新詩運動は、その空前未曾有の反帝反封建の徹底性により、大きな成果を獲得した。しかしまた群衆化、民族化問題を良好に解決していない。毛主席の『延安文芸座談会における講話』に至り、やっとこの二つの問題を明確に指摘し深く掘り下げて解決し、中国文学芸術に詩歌の発展を総括し唯一正しい工農兵の方向を指摘した。この方向の下に、新詩運動は今日正に勝利と前進を続けている。

しかしこれは梁啓超の詩論に対する文学的評価というよりも、中国独特な文学と現実政治との強い関連性を反映した評価といえる。

梁啓超の刊行した雑誌が論壇を主導し一世を風靡したのは、当時の中国の政治・社会の課題を明瞭的確に把握して読者に理解し易い文章で伝えたからである。しかし、保皇派対革命派の政治論争の中で、梁啓超は時代を先導できなくなった。また五四文化運動の中では、『飲冰室詩話』は時代を主導する『新青年』の前夜の産物と看做され、旧世代文化に加担する時代遅れの論調と評価された。梁啓超は前半生で中国の政治、社会、文化、芸術面を論じて時代を先導したが、後半生で急進する時代に後れる点を批判された。このように梁啓超に対する評価は時代の要請を反映して変化している。

梁啓超の明らかにした「詩界革命」の新意境、新語句、旧風格の標語の中で、旧風格の「旧」はこの時代に人々が最も排斥すべき観念と考え、それだけで負のイメージを与えた。しかし、実は旧風格は長い中国古典文学の伝統と蓄積を意味し、その基礎の上に新たな中国文学は発展するのである。従来の『飲冰室詩話』に対する世評はこの点を見落としている

と筆者は考える。

三・三　『飲冰室詩話』の雑誌連載の影響

『飲冰室詩話』は定期刊公雑誌の時代潮流に乗り、『新民叢報』の最盛期販売部数は一万四千部に達した。政治論説雑誌であり、購入者は必ずしも詩話欄の読者ではないが、非常に多くの人の目に触れて大きな影響を与えたであろう。

雑誌連載の効果の一つは、梁啓超の知人や未知の読者が作品を寄稿し、また流布されていないが話題性のある作品を届けたことである。梁啓超は受取った詩を喜んで雑誌に掲載した。例えば第七段には、梁啓超の親しい友人の狄葆賢が自作詩を送ったことが書かれている。第二一段には、梁啓超の友人唐才常と共に漢口事変の自立蜂起に失敗して死んだ何鉄笛の絶命の詞を送られて掲載した。第二九段には、梁啓超が尊敬する黄遵憲の詩「今離別」全篇は知らなかったのを、知人が書き送り喜ぶ様子を述べた。第三四段には東亜傷心人なる匿名の読者から送られた詩が白居易詩に比肩すると言う。康有為はヨーロッパやアメリカ旅行中に作った詩を郵送し、よく掲載された。このような例は枚挙に暇ない。

倉田貞美は『中国近代詩の研究』で、南社の柳亞子が弱年の頃『飲冰室詩話』に傾倒したと、その自伝を引用している。[22] それによると、十六歳の時『新民叢報』の『飲冰室詩話』と「詩界潮音集」を読み、詩学革命に共感して古い自作の詩を焼き捨て、梁啓超と龔自珍を心中の両尊偶像とした。章太炎の梁啓超攻撃の影響を受けて彼への信仰心は棄てたが、未だに梁啓超の詩句の幾句かは喜ぶという。

易鑫鼎は『梁啓超和中国現代文化思潮』の中で梁啓超が胡適、魯迅、毛沢東に与えた影響を夫々個別に論じて、彼らは

いずれも『新民叢報』を購読して、梁啓超から大きな影響を受けたという。[23] 彼らは『飲冰室詩話』を読んだはずであるが、その影響を柳亞子の場合のように雑誌全体の影響から抽出して見ることはできない。一九二一年の舒新城の梁啓超宛書簡から、当時梁啓超は毛沢東が設立した湖南自修大学に関心をもったことが窺われるが、毛沢東と接触する機会はなかった。[26] 同年毛沢東は新民学会長沙会員新年大会で改良派梁啓超・張東蓀を批判した。以後梁啓超は革命派からブルジョア改良派とされる。[27] 毛沢東は文革終了まで中国思想界を支配し、梁啓超の負の評価は決定的となった。

四　王国維『人間詞話』の構成及び主張

四・一　王国維の生涯と梁啓超

王国維は梁啓超より四年晩く生まれ、二年早く死んだ。王国維は上海で『時務報』の仕事に就き、日本の東京物理学校に留学し、また辛亥革命後直後に日本に亡命した。『時務報』は嘗て梁啓超が主筆を務めたこともあり、王国維の日本滞在中は梁啓超も日本に滞在したが、いずれの際にも会う機会はなく、前半生で両者はすれ違ったといえる。王国維は日本亡命から帰国後、倉聖明智大学教授、北京大学の通信導師、廃帝溥儀の南書房行走等を経て一九二五年、四九歳で清華学院教授となった。清華学院では、梁啓超、陳寅恪と同僚となり、学生達から併せて「三巨頭」と称されたという。しかし王国維は頤和園で入水自殺して、人々に衝撃を与えた。梁啓超は娘の梁令嫻宛書簡で彼を悼み、「この公は学問を治める方法がきわめて新しくかつ緻密であり、今年まだ五十一歳という若さだ。もしあと十年長生きしていれば、中国の学界のために限りなく力を発揮しただろうに」、と述べている。[28]

王国維は一九〇六年、三十歳で「人間詞話甲稿」を、翌年「人間詞話乙稿」を書き、三三歳から三四歳にかけて『人間詞話』を改めて書き『国粋学報』誌上に発表した。[29] 本論では『人間詞話』を『飲冰室詩話』と対比するが、詞話と詩話の

異同について簡単に言及する。詞話は詞を対象とする文学評論であるが、その主要テーマは具体的詞作品成立の背景（本事）と詞文評論であり、対象作品ジャンルを除けば詩話と全く同じである。更に詞も広義の詩であり、両者は同列に論じ易い。但し詞話の数は詩話に比べてずっと少ない。[30]

四・二　『人間詞話』における「境界」説

『人間詞話』のテーマは境界である。境界は本来地政学的な境界地域、各種の状況、心理的境地等を指す言葉である。漢語大詞典が詩文絵画等の境地と説明するのは、『人間詞話』を承けている。しかし王国維自身は明確な定義をせずに、いくつかの具体例を挙げてこれは境界である、これも境界であると述べるのみである。なお井波陵一は『人間詞話』のこのような記述法を、体系構築ではなく断片の集積による芸術批評として王国維が選択したという。[31] 筆者は「意境」、「情景」等が「境界」に近い言葉であると考えるが、解釈に先立ち以下に王国維の主要な境界の説明例を見て行きたい。王国維は冒頭で境界の重要性を述べる。境界には外物景観と心情の二種類があるという説明と共に、続けて次に引用する。[32]

詞以境界為最上。有境界則自成高格、自有名句。五代北宋之詞所以以獨絶者在此。（一則）

詞は境界を最高価値とする。境界がある詞は自然に高い風格を形成し、自然に名句が生まれる。五代・北宋の詞がひときわ優れている理由はここにある。

境非獨謂景物也。喜怒哀樂、亦人心中之一境界。故能寫真景物、真感情者、謂之有境界。否則謂之無境界（六則）

境界とは景物のことだけを言うのではない。喜怒哀楽も、また人の心中の境界である。それ故に真の景物、真の感

情を描くことができれば、これを境界があると言う。そうでなければ、境界がないと言う。

先ず、詩詞の最も重要なことは境界であるという。そして真の景物、真の感情を描写する詞は境界があり、そうでない場合を境界がないという。

第二則、五則では、境界の描写法を、造境（理想虚構）と写境（自然描写）に分けて説明をする。彼は、造境はヨーロッパ文学ではロマン主義に対応し写境は写実主義に対応するが、中国古典詩詞では造境は必ず自然から出発しておりまた写景も理想境に近い景色を見るので、作品中で両者を劃然と区別できないという。

第三則、四則では、景物の観察と自我との関係を、自我意識のある場合と忘我の場合に分けて対比する。王国維は前者を有我の境、後者を無我の境と呼ぶ。前者は我を以て物を観るが（有我之境、以我觀物）、後者は物を以て物を観るともいい（無我之境、以物觀物）、詞人は多く有我の境をとるが豪傑の士は無我の境が可能だという。

第八則では、境界には大小の差別があるが、それは詞の高低優劣を決めるものではないといい、何種かの詩詞の例を引用して示す。

第二六則では、人生における成功者には三段階の境界があるといい、晏殊、欧陽脩、辛棄疾の三つの詞を引用する。創業開始・始学、事業推進・治学、事業完成・学問成就の三段階の境界を次のように説明する。

古今之成大事業、大学問者、必經過三種之境界。「昨夜西風凋碧樹。獨上高樓、望盡天涯路。」此第一境也。「衣帯漸寛終不悔、為伊消得人憔悴。」此第二境也。「衆裏尋他千百度、回頭驀見、那人正在、燈火闌珊處。」此第三境也。此等語皆非大詞人不能道。然遽以此意解釋諸詞、恐為晏歐諸公所不許也。（二六則）

古今の大事業、大学問を成就した人々は、必ず三種の境界を経過している。「昨夜西風碧樹を凋ます。独り高楼に上り、望み尽す天涯の路」は、第一の境界である。「衣帯漸く寛くなるも終に悔いず、伊の為に人は憔悴に消得すを」は、第二の境界である。「衆裏に他を尋ぬること千百度、頭を回らせ驀として見れば、那人正に在り、灯火闌珊たる処」は、第三の境界である。これらの語はすべて大詞人でなければ言うことができない。しかし唐突にこれらの詞をこの意味に解釈するのは、恐らく晏殊、欧陽脩の諸公に同意して貰えないであろう。

三つの原詞の解釈は王国維自ら言うように牽強付会であるが、彼はこの見解が気に入っていたらしく、「文学小言」第五則の中で同じ論を更にわかり易く説明する。[33] 井波陵一はここにはニーチェの影響を見ることができるという。それは、ニーチェがツアラツーストラに精神の三段階の変化について語らせ、どのようにして精神が駱駝（辛抱強さの象徴）から獅子（創造のための自由の象徴）を経て幼子（無垢と聖なる肯定の象徴）になるかの比喩を述べることを指す。[34]

滕咸惠は、王国維の境界説は南宋厳羽の「滄浪詩話」中における興趣説、清代四大詩論の一つである王士禎の神韻説を統合発展させ、更にカント、ショーペンハウェル、ニーチェ等の西洋美学思想の観点を加えた詩詞論だという。[35] 王国維は二十歳代後半、師範学校教員時代に日本語でドイツ哲学を独習し、カント、ショーペンハウェル、ニーチェ等の影響を受けた。『人間詞話』十八則ではニーチェの『ツアラツーストラはかく語りき』から「あらゆる文学作品中で私は血でもって書かれたものを愛す（一切文學、余愛以血書者）」を引用し、李後主の詞はそれに相当すると評論している。王国維自身は興趣説、神韻説は一面を衝いているが、境界説は詩詞の審美鑑賞を全面的に説明するという（滄浪所謂興趣、阮亭所謂神韻、猶不過道其面目、不若鄙人拈出境界二字、爲探其本也。九則）。さらに王国維は五代南唐後主の李煜を評論する中で、詞人は赤子の心を持たねばならないという（十六則）。また詩詞は交際手段とか社会的効用を求めるべきではなく、

毀誉褒貶や歴史評価を描写の対象とすべきではないと主張する（五七則）。

次に第十六、五七則の主張を引用しよう。

詞人者、不失其赤子之心者也。故生于深宮之中、長于婦人之手、是後主為人君所短處、亦即為詞人所長處。（十六則）

詞人とは、その赤子の心を失わない者である。それ故に宮廷奥深くに生まれて、婦人の手により成長したのは、後主が君主であるには短所であったが、詞人であるには長所であった。

人能于詩詞中不為美刺投贈之篇、不使隷事之句、不用粉飾之字，則于此道已過半矣。（五七則）

もし人が詩詞の中で他人を賛美し中傷し贈答する篇を作らず、典故の句を使わず、飾りたてる文字を使わぬことができれば、詩詞を作る道の半分は達成されている。

五七則の美刺は毀誉褒貶のこと、投贈は贈答詩を指す。また隷事は典故を列ねること、典故の多用は王国維の排斥するところである。

古典哲学の命題の一つは、人生における最も重要な価値を真、善、美の中から選ぶことである。王国維はドイツ哲学、美学を研究したのでこのような視点で詩詞を見たはずである。彼の「境界」説は、詩詞が美を表現するものだと主張する。しかし美は真、善と比べて最も論理的に説明し難い。それは感性に訴えるものだからである。

以上王国維の「境界」に関する具体的記述例を引用し、また幾つかの箇所の説明を加えた。『人間詞話』一則から六則

までを整理すると、境界とは優れた詩詞の描写対象と描写方法を述べるものと解釈できる。描写対象は景物と情感であり、第一にその両者がそれぞれ真実でなければならず、第二に両者が一篇中で密接な繋がりをもつことを、「境界がある」と王国維は表現するのである。この観点から境界の構成要因を分析すると、「境界」は「意境」に近く、更にこれは「意」と「境」に分割でき、それぞれは「抒情」と「舒景」との二種類の描写と見ることができる。しかし王国維は両者を劃然と区別する分析的表現をとろうとはしない。それ故にその理想像は体系的に述べられず、論理的説明を求める読者には難解である。一方また「境界」説は梁啓超の「飲冰室詩話」が前提とする社会の革新に貢献するための詩、「詩は志を言う」とする伝統的詩学精神に基づく詩観に対立し、審美詩観あるいは芸術至上主義の立場でもある。

王国維は以上のような「境界」説に基づき、『人間詞話』の第二段階では、唐末・五代から南宋までの詞人作品を中心に評論する。取上げる詩詞はいずれもよく知られた作品である。評論の方法は、幾人かの詞人・詩人の作品を比較して、最も優れた境界の作品とそれに及ばない作品を比較しながら、王国維の理想的境界の具体例を次々に示していく。王国維が特に高く評価する詞人は、五代では李煜、馮延之、韋荘、北宋では欧陽脩、秦観、蘇軾、南宋では辛棄疾、清代では納蘭性徳である。制限付きで高く評価するのは北宋の周邦彦と南宋の姜夔である。時代的には唐末・五代・北宋を高く評価し、南宋は辛棄疾、姜夔以外は評価が低い。

四・三　詩詞文体の変遷論

『人間詞話』第五三則は、四庫全書の文体優劣論が詞を詩より低く見るのを否定し、詩と詞に高下の区別はないという。第五四則では、詩人は境界の独創性を追求するので、文体が時代的に変遷したと次のようにいう。

四言敝而有楚辭。楚辭敝而有五言。五言敝而有七言。古詩敝而有律絶、律絶敝而有詞。蓋文体通行既久、染指遂多、自成習套。豪傑之士、亦難于其中自出新意、故遁而作他體、以自解脱。一切文體所以始盛中衰者、皆由于此。故謂文学後不如前、余未敢信。但就一體論、則此説固無以易也。（五四則）

四言詩が疲弊すると楚辞が現れた。楚辞が疲弊すると五言詩が現れた。五言詩が疲弊すると七言詩が現れた。古詩が疲弊すると律詩絶句が現れた。思うに文体というものは長いあいだ通行すると、使用する者が結局多くなり、自然に常套化する。非凡な人々でもその中で新鮮さを出すのは困難になり、それ故に敬遠して他の文体を作り、それにより旧弊から逃れる。すべての文体が最初は隆盛でありながらその中で衰退する理由はこのためである。それ故に文学は歴史的に後世のものは前代に及ばないという考えは、私は信じない。但し一つの文体について論ずれば、この説は当然変更することはない。

王国維はこれを文学ジャンル全般の変遷論に発展させた。後に『宋元戯曲考』序で、「凡そ一代には一代の文学がある。楚の騒、漢の賦、六朝の駢文、唐の詩、宋の詞、元の曲は皆所謂一代の文学であり、そして後世はこれを受け継ぐことができなかった（凡一代有一代之文學。楚之騒、漢之賦、六朝之駢語、唐之詩、宋之詞、元之曲、皆所謂一代之文學、而後世莫能繼焉者也。）」という。[36] 滕咸惠はこの文体変遷論に関して、王国維は因襲模倣に反対し革新独創を主張し、五四新文学運動の唱導者胡適、陳独秀の文学革命思想に影響を与え、新しい潮流の推進作用を果たしたという。[37]

また『人間詩話』第五九則で、境界説の観点から近体詩の中では興趣寄託と抒情表現に適するのは五言七言絶句が第一、律詩がこれに次ぎ、排律は最下位という。また詞では小令が絶句、長調が律詩、長調中の「百字令」、「沁春園」等は排律

に相当するという（近代詩体制、以五、七言絶自爲最尊、律詩次之、排律最下。…詞中小令如絶句、長調似律詩、若長調之「百字令」、「沁園春」等、則近於排律矣）。王国維は律詩や長調の厳格な格律は思想感情表現を束縛し境界を妨げると見たのである。

四・四　王国維と梁啓超の対比

梁啓超と王国維の対比を整理しておこう。梁啓超は外交的で陽気で進取の精神に富み、多少軽率な面もあるが、政治面でも活躍し、世界各国を歩いた。王国維も新時代の動きに敏感で、人並み以上の行動力を示した。ただ病弱な体質で、内向的で憂欝症的性格、沈思黙考する学者のイメージが強い。[38] 一生辮髪を守り反功利主義の立場を貫く一徹さを持ち、[39] また頤和園で入水自殺した。二人の経歴と性格が対照的であるように、『飲冰室詩話』と『人間詞話』も対照的である。梁啓超は詩を理想の政治社会実現に貢献する手段として捉え、「詩は志を言う」とする詩観が強い。王国維は詩詞を人生最高の価値である美の鑑賞手段として捉え、「詩は情に縁る」とする立場が強い。しかし二人は、西欧文化を研究した上で中国古典を大切にして、伝統的文言を尊重する立場は共通すると筆者は考える。王国維は『人間詞話』中で詩文体の時代的変遷を論じたが、それは王国維の意図と関係なく五四「文学革命」運動に推進力を与えたとも言われる。これは『人間詞話』の後世の評価の大きな要因となった。しかし『人間詞話』の最大の詩学上の意義は、詩詞に対する中国の伝統的鑑賞を西洋美学の視点から見直して新解釈を与えたことだと筆者は考える。

五　まとめ―梁啓超の評価

梁啓超に対する後世の評価を簡単に整理したい。そこには政治思想面と文化思想面の二つの視点がある。清朝の変法維

新挫折後に中国の変革を求める勢力は、康有為を指導者とする保皇立憲派と孫文を指導者とする革命派に二分され、梁啓超は前者に属した。章太炎の『民報』と梁啓超の『新民叢報』の間の論争から革命派の梁啓超攻撃が始まり、梁啓超が政治家として活動するに伴い批判は強まり、一九二一年の毛沢東による思想批評に至った。一方五四文化運動の中で、伝統的古典詩は旧詩として否定的評価を受けた。梁啓超は白話運動を否定しなかったが、積極的に加担もしなかった。人民文学出版社版『飲冰室詩話』の一九五九年版出版説明には、「詩話」が晩清期は一定の進歩性があったが、その主張は改良主義であり、文中には反動要素があり全て批判が必要だという。(40)

文革終了後、政治雰囲気の緩和に伴い中国の文学評論は視野が拡大した。二〇〇四年出版の黄修己『二十世紀中国文学史』は現代新旧の詩を論じ、五四運動で衰亡したかに見える旧体詩詞が実は現在までしぶとく生き残り、西洋文化の吸収を図りながら、中国伝統文明の上に立ち難局に対峙する知識人の精神を表現する多数の優れた旧体詩作品が書かれたという。(41)これは先に述べた張寅彭の観点と共通する。今日中国詩壇で新詩と旧詩の勢力が半々だとすれば、梁啓超が白話詩論で述べた予測の通りである。

このように『飲冰室詩話』は、革命を標榜しながら初歩的進歩性に留まり本格的革新性に反すると見做され、後世の否定的評価を受けてきた。それは、政治思想面と文化思想面の歴史的変遷に左右された評価と言うべきであろう。しかし筆者は、『飲冰室詩話』は時代に左右されない価値があると考える。それは「詩界革命」が求めた理想の詩の三要件、新意境、新語彙、旧風格の内、旧風格に関するものである。何故ならば前二者に対する『飲冰室詩話』の引例は時代の変遷に伴い次第に新の意味が薄れ当時の時代的特徴を残すだけになったが、旧風格は伝統的古典詩が力を蓄え時代を越えて長く引継がれることを述べており、今日なお有効だからである。古典詩は現在なお読み継がれ作り継がれており、将来もそう簡単には滅びないであろう。

〔註〕

(1) 『飲冰室詩話』は雑誌『新民叢報』に掲載後、順序を若干変更して全二〇四段中の第一七四段までが『飲冰室合集』中に「詩話」の題目で纏めて収容され、後に人民文学出版社から中国古典文学理論批評専著選輯の一冊として単行本が出版され、広く流布した。詳細は注3参照。最近『飲冰室合集』未収録の梁啓超著作を集めた夏曉虹輯『飲冰室合集・集外文』(北京大学出版、二〇〇五年)が出版され、「詩話」の残り三十段分も含まれる。また沈鵬主編『梁啓超全集』(北京出版社版、一九九九年)は「詩話」全体を一括して収録する。なお本論ではこれらをすべて『飲冰室詩話』と表記する。

(2) 『飲冰室詩話』第四段で梁啓超は、近世詩人で新理想を旧風格に鎔鑄できる者は黄遵憲を推すべきだという(近世詩人能鎔鑄新理想以入舊風格者、當推黄公度)。

(3) 細川直吉「梁啓超《飲冰室詩話》の詩学」、『二松學舍大学人文論叢』第八十七輯(二〇一一年)、九九—一二一頁。

(4) 林明德「梁啓超與詩界革命」、『輔仁國文學報』五集(一九八九年)、八九—一一一頁。

(5) 丁福保編、王夫子等撰『清詩話』、郭紹虞前言(藝文印書館、一九七七年)、一頁。

(6) 歐陽脩著、李逸安點校『歐陽修全集』第五冊詩話、中国古典文學基本叢書(中華書局、二〇〇一年)、一九四九—一九六一頁。彼は最初この文をまとめて一篇の文章としたのではなく、雑書一巻中の九項目の随筆として書いた。ジャンルとしての詩話と区別するために欧陽脩の「詩話」は、現在では「六一詩話」あるいは「欧陽脩文忠公詩話」と呼ぶ。

(7) 蒋寅撰『清诗话考』清诗话见存书目、清诗话待訪书目(中华书局、二〇〇五年)。なお著者名・書名・出版社の表記(簡体字使用)は初出による。以下も同じ。

(8) 郭紹虞編選『清詩話続編』(上海古籍出版、一九八三年)。

(9) 張寅彭主編『民國詩話叢編』、自序(上海书店出版社、二〇〇二年)。

(10) 同前、凡例、七頁で、「若梁啓超飲冰室詩話、…等、雖係名作、然均作於民国前夕、不屬本編範圍」という。

(11) 同前、自序、四—六頁で、「現代詩壇舊體詩與新詩分佔半壁江山」という。

(12) 約十年間とされる五四文学運動の開始時期は陳独秀が上海で『青年雑誌』(後に『新青年』と改題)を創刊した一九一五年とする見方と、『新青年』誌上に胡適、陳独秀の白話文を文言文に変えることを主張する論文を掲載した一九一七年とする見方がある。欧陽哲生は前者をとり(欧阳哲生「北京大学与〝五四〟文化运动」、北京大学中国語研修历史文化讲座、二〇〇五年九月

五日)、黄修己(注39参照)は後者の立場をとる。実際に『新青年』誌上に胡適、沈尹默、劉半農が初めて白話詩を発表したのは一九一八年である。

(13) 梁啓超著『飲冰室合集』文集第五冊文集之四十三「晩清兩大家詩鈔題辭」(中華書局、第五次印刷二〇〇八年)、六九—八〇頁。

(14) 『飲冰室詩話』冒頭のこの文は有名であり、倉田貞美『中国近代詩の研究』第二篇第三節飲冰室詩話では前半を取上げるが芳馨悱惻はそのまま訓読している(大修館書店、一九六九年、二七九頁)。細川直吉「『飲冰室詩話』にみる尊師の贈詩—梁啓超に贈られた康有為と黄遵憲の詩」、『二松學舍大学人文論叢』第八十九輯(二〇一二年)、四〇—六七頁。

(15) 注4参照。

(16) 『飲冰室詩話』の取上げる詩人及び詩の数に関しては許常安「飲冰室詩話に見える晩清〈詩界革命〉の主張」、『日本中國学會報』第十七集(一九六五年)、一六四—一八二頁、倉田貞美著『中国近代詩の研究』第二編第一章第二節飲冰室詩話(大修館書店、一九六九年)、二六八—二八五頁等に述べられている。筆者の計数はこれらと一致せず、全詩句は八五三件である。但し、完全な一首の詩とは言えぬ片言双句、対句一聯から黄遵憲の二千二十字に及ぶ五言排律長篇詩まですべてを一件とした。

(17) 陳良运著『中国诗学批评史』第二四章二黄尊宪、梁启超的『诗界革命』论(江西人民出版、二〇〇一年)、六〇一—六〇八頁。

(18) 黄遵憲著、錢仲聯箋注『人境廬詩草箋注』自序(上海世紀出版股份・上海古籍出版、第三次印刷二〇〇七年)、三頁。

(19) 小河陽訳「ヨハネの黙示録」、新約聖書V(岩波書店、一九九六年)二〇一、二三八、二四二—二四三頁。

(20) 梁啓超著『飲冰室合集』専集第二冊専集之二十二附録二「夏威夷遊記」(中華書局、第五次印刷二〇〇八年)、一八五—一九六頁。

(21) 梁啓超著、舒蕪校點『飲冰室詩話』校點後記、郭紹虞・羅根澤主編中国古典文學理論批評專著選輯(人民文学出版社版、一九八二年)、一四三—一四八頁。

(22) 倉田貞美著『中国近代詩の研究』第二編第三章第二節丘逢甲と狄葆賢、第三編第二章南社の詩人第一節一詩界革命運動との関係(大修館書店、一九六九年)、三九九—四一七、四七七—四八四頁。

(23) 易鑫鼎著『梁启超和中国现代文化思潮』第十六章胡适和梁启超(主都师范大学出版、二〇〇九年)、四四五—四五八頁。なお注24、25参照。

(24) 同前、第十七章魯迅和梁启超、四五九—四七六頁。

(25) 同前、第十八章毛泽东和梁启超、四七七—四九〇頁。
(26) 丁文江・趙豊田編・島田虔次訳『梁啓超年譜長篇・第四巻』一九二一年（岩波書店、二〇〇四年）、三六〇—三六三頁。
(27) 陳立新著『梁啓超とジャーナリズム』第三部第三章第二節「梁啓超と社会主義論戦」（芙蓉書房出版、二〇〇九年）、二六九—二七二頁。
(28) 丁文江・趙豊田編島田虔次編訳『梁啓超年譜長篇第五巻』一九二七年（岩波書店、二〇〇四年）、二四三—二四七頁。
(29) 本論で扱うのは『国粋学報』掲載の所謂通行本で全六二則であり、これを以下『人間詞話』で表記する。
(30) 『四庫全書』「西河詞話」提要には、「宋以来詩話の著作は多いが詞話の著作は少ない（宋以來撰詩話多、撰詞話者較少）」と書かれている。実際に『四庫全書』集部詩文評類には六十三種の作品が収容され、詞曲類詞話之屬に五種の作品が収容されているが、これは詩話と詞話の数値比較の目安になる。一方比較的最近発行された唐圭璋編『詞話叢編』全五冊（中華書局、一九八六年）は宋以降民国期までの詞話八十五種を採録して、また朱崇才編纂『詞話叢編續編』全五冊（人民文学出版、二〇一〇年）は唐編未収録の詞話三十二種を採録する。これらは歴代主要詞話を網羅すると考えられるが、これに対して注7の『清詩話考』清代詩話見存書目九六六種も数値比較の目安を与える。
(31) 井波陵一「斷片であること—王國維の『人間詞話』について」、東方學報京都第七十九冊（二〇〇六年）、二一二—一八〇頁。井波はヴァルター・ベンヤミンの『ドイツ・ロマン派主義における芸術批評の概念』を引用している。
(32) 『王国維先生全集・初編第四冊』人間詩話卷上（台灣大通書局印行、一九七六年）、一五七一—一五八八頁。『王国維先生全集』の原文は句読点がないが、簡体字版清・王国維著滕咸惠译评『人间词话』（吉林文史出版、一九九九年）に従い加える。以降の『人間詞話』引用文も同じである。
(33) 『王国維先生全集・初編第五冊』靜安文集續編・文学小言（台灣大通書局印行、一九七六年）、一九一一—一九二〇頁。
(34) 井波陵一論文（注31）参照。ニーチェ著、氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った・上』、第一部ツァラトゥストラの説教・三段の変化（岩波文庫、一九六七年）、三七—四〇頁。
(35) 清・王国维著滕咸惠译评『人间词话』第三—五則、第一八則（吉林文史出版、一九九九年）、五—一二頁、三〇—三二頁。
(36) 王国維著井波陵一訳『宋元戯曲考』序、東洋文庫六二六（平凡社、一九九七年）、九—十頁。
(37) 注35、八六—八八頁。

(38) 『王国維先生全集・初編第五冊』靜安文集續編・自序（台灣大通書局印行、一九七六年）、一八九四―一八九九頁。三十歳を過ぎた時、生涯と勉学を回顧して以後の研究目標を整理し、当時の心理状況も述べている。

(39) 岸洋子「王国維研究ノート(1)〈辮髪〉攷」、『中國文学研究』第十期（早稲田大學中國文學會、一九八四年十二月）、六五―七十頁。

(40) 梁啟超著、郭紹虞・羅根澤主編「飲冰室詩話」、出版說明（人民文學出版、一九五九年）、一―二頁。

(41) 黄修己主編『二十世纪中国文学史』附录一『五四』后中华诗词发展概述（中山大学出版、二〇〇四年）、三二七―三四一頁。